ネチケット尺度の作成−高校生ウェブ調査による検討—

Construction of a scale of Netiquettes for high school students

熊崎　あゆち[1]・櫃淵　めぐみ[2]・堀内　由樹子[1]・八巻　龍[2]・鈴木　佳苗[2]

Ayuchi KUMAZAKI[1], Megumi KASHIBUCHI[2], Yukiko HORIUCHI[1], Ryo YAMAKI[2], Kanae SUZUKI[2]

[1]お茶の水女子大学・[2]筑波大学

[1]Ochanomizu University, [2]University of Tsukuba

＜あらまし＞ネットを通じたコミュニケーション場面について適切な善悪判断ができるかどうかをネチケットと定義し、ネチケット尺度を作成した。ネットを介した仲間内攻撃行動に遭遇した高校生 100 名を対象に尺度の信頼性・妥当性の検討を行った。ネチケット尺度について高い信頼性が見られたが、ネットを介した仲間内攻撃行動に遭遇した場合にとった行動との関係が見られず、妥当性については一般サンプルにおける検討が望まれる。

＜キーワード＞　情報教育, 情報リテラシー, メディアリテラシー, 評価項目, テスト

１．はじめに

近年は、子どもたち同士でメディアやネットを用いたコミュニケーションを行う機会が増加する中で、「ネットいじめ」のような対人トラブルが起きている。文部科学省の通知(2008)では、「ネットいじめ」の予防のためにも情報モラル教育がより一層促進されることが推奨されている。

ネットいじめのようなネットを介した子ども同士のトラブルを防ぐためには、具体的なネットを通じたコミュニケーション場面について適切な善悪判断ができるかどうかということが重要であると考えられる。熊崎ら(2012)では、これらの適切な判断ができることが、ネットを用いた仲間への攻撃行動を減少させる結果が得られている。

そこで、本研究は、ネットやメディアを介した対人行動に関する善悪判断ができるかどうかについて「ネチケット」と定義し、熊崎ら(2012)の尺度を改良し、その信頼性と妥当性について高校生を対象にウェブ調査で検討を行った。

2. 方法

2.1 調査対象者　ウェブ調査会社を通じて、ウェブ上で 2639 名の高校生を対象に、スクリーニングを実施し、Kashibuchi et al.,(2012)で比較的生起頻度が高く見られた『ネット上で仲間外しを呼び掛ける書き込みを行う』というネットを介した仲間内攻撃行動に遭遇したことがある者 100 名(男子 39 名，女子 61 名；高校 1 年生 28 名，高校 2 年生 38 名，高校 3 年生 34 名)を対象者とした。平均年齢は 16.95 歳(*SD*＝ .83)であった。

2.2 調査項目　***ネチケット***　熊崎ら(2012)の9項目をもとに、11項目を作成した(表1)。それぞれの項目について、どう思うかを「Aさんは悪くない」から「Aさんは悪い」までの4件法で尋ねた。どの項目の行動も、ﾈｯﾄ上での行為として「やってはいけないこと」として取り上げられているものである。社会的望ましさの影響をなるべく小さくするために、行為ごとに善悪判断を尋ねるのではなく、自分ではない架空の人物Aの行動について善悪判断を尋ねた。

ﾈｯﾄを介した仲間内攻撃行動に遭遇した場合に取った行動　ネチケット尺度の妥当性を検討するために、ネットを介した仲間内攻撃行動に遭遇した場合に、どのような行動を取ったかについて、加害者に続く形で攻撃に参加することや攻撃に賛同の意思を示すことで攻撃状態の維持に貢献する行動（追従加害行動）、攻撃行動を制止、仲裁、通報などの手段によって攻撃状態の抑制に貢献する行動（攻撃抑制行動）、被害者を慰めるなどの被害者に対する心理的なサポート行動（慰撫行動）、特に行動せずに目撃していただけの行動（傍観行動）の4種類の行動、そしてこの4種類の行動にあてはまるものがない場合について23項目を用いて「ある・ない」で尋ねた。

社会的望ましさ　統制変数として、日本語版MMPIの自分をよく見せようとする項目(1989)から選挙に関する1項目を除いた14項目で尋ねた。

3. 結果と考察

ネチケット得点の平均値と標準偏差を表 2 に示した。ネチケットの平均点について、性別について *t* 検定によって比較を行ったところ、有意に女子の方が高かった(t (96)= 3.53, p < .01)。学年の間でネチケットの平均点について一元配置分散分析を実施したところ、有意な差が見られたため(F (2,95)= 4.52, p < .05)、Tukey 法による下位分析を行った結果、高校 2 年生は高校 1 年生よりも有意にネチケットが高く(p < .05)、高校 3 年生も高

表１　ネチケット尺度の平均値(*SD*)

全体	男子	女子
35.18(6.15)	32.58（7.85）	36.83（4.06）

表2　ネチケット高群・低群の平均値

	低群	高群
1.　A さんは、いたずらで、B さんの名前で C さんにﾒｰﾙを出した	3.10	3.85
2.　A さんは、B さんにﾒｰﾙを送信したが、返事がすぐに来ないので、ｲﾗｲﾗして、怒った	2.64	3.48
3.　A さんは、ﾈｯﾄ上で出どころのはっきりしないｳﾜｻ話や、本当かどうかわからない情報を書いてもりあげた	2.88	3.75
4.　A さんは、ﾈｯﾄでは顔が見えないことを利用して、ﾈｯﾄ上で B さんのふりをした	3.40	3.98
5.　A さんは B さんからきたﾒｰﾙを読んでｲﾔな気分になったので、すぐに言いかえすﾒｰﾙを B さんに送った	1.86	2.56
6.　A さんは B さんのﾈｯﾄ上の発言に対して、B さんをののしるような書き込みをした	3.02	3.75
7.　A さんは、ﾈｯﾄ上で変な発言を繰り返す B さんのことを別のｻｲﾄで他の人と話題にして楽しんだ	2.48	3.52
8.　A さんは、ﾈｯﾄ上で、自分の意見に対してBさんが反論してきたので、Bさんに対していやみをいった	2.52	3.44
9.　A さんは、友達の B さんがﾈｯﾄ上に書き込んだ情報を特に吟味せず転載したり、ﾘﾂｲｰﾄをしたりして広めた	2.72	3.46
10. A さんは、A さんの友だちにしか見られないような形で、B さんの写真を、B さんの許可を得ずに自分の SNS(GREE、ﾓﾊﾞｹﾞｰ、mixi(ﾐｸｼｨ)、Facebook など)のﾍﾟｰｼﾞに掲載した	3.08	3.96
11. A さんは、仲の良い友だちの B さんの画像を加工した面白い画像を、ｸﾗｽ全員に送信した	3.18	3.92

表３　共分散分析における *F* 値

	全体	男子	女子
追従観衆	1.67	.02	5.56*
攻撃抑制	.89	.27	2.17
慰撫	1.63	.87	1.67

註：$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$

校１年生よりネチケットが高い傾向が見られた($p < .10$)。

3.1 項目分析

スコアの分布に極端な偏りがないことを確認したうえで、GP 分析及び IT 相関分析による項目分析を行った。GP 分析において、すべての項目で上位群と下位群の平均値間(表 3)に有意な差が見られた(ts =4.64－6.84) 。このようにネチケット高群はすべての項目において、ネチケット低群よりも得点が高いことが確認された。IT 相関分析において、各項目の得点と尺度得点の相関係数を検討した結果、すべての項目で有意であった(rs =.51－.74)。

3.2 尺度の内的一貫性と安定性

尺度の内的一貫性については、α＝.88 で、あり高い内的一貫性を持つことが示唆された。

3.3 尺度の妥当性

社会的望ましさとのピアソンの積率相関係数を算出したところ、全体で r=.34 (p<.01)、男子で r=.44 (p<.01)と有意な相関が見られたが、女子では有意な相関が見られなかった(r=-.05, *n.s.*)。

尺度の妥当性について、社会的望ましさを共変量とする追従加害行動、攻撃抑制行動、慰撫行動、傍観行動を行ったかどうかを独立変数、ネチケットを従属変数とする共分散分散分析を実施した。傍観行動以外のすべての分析において、回帰の平行性及び有意性が確認されたが、追従加害行動、攻撃抑制行動、慰撫行動を行ったかどうかによるネチケット得点の有意な差は見られなかった(表3)。男女ごとで同様の分析を行ったところ、傍観行動以外のすべての分析において、回帰の平行性及び有意性が確認され、女子のみにおいて追従観衆行動を行った者の方が有意にネチケットが低かった。熊崎ら(2012)、ﾈｯﾄを介した仲間内攻撃行動について、長期的な抑制効果を持った。女子の追従観衆行動について、これらと同じ方向の結果が得られた。しかし、攻撃抑制及び慰撫行動については男女ともに関係が見られなかった。

4. まとめ

本研究は、ネチケット尺度の作成を行った。その結果、高い信頼性が得られたが、妥当性については支持する結果は得られなかった。本サンプルはﾈｯﾄを介した仲間内攻撃行動について関与経験があった者のみであり、一般サンプルにおける検討が必要である。

引用文献

熊崎(山岡)あゆち・鈴木佳苗・赤坂瑠以・坂元章・橿淵めぐみ.(2012).子どものﾈｯﾄ利用といじめ(8)―ICTスキルと情報モラルがﾈｯﾄ及び学校でのいじめの加害経験に与える1年後の影響について―, *日本発達心理学会第23回大会発表論文集*, 674.

日本MMPI研究会(1989). 日本版MMPI・ハンドブック一部増補版, 43.

Kashibuchi, M., Horiuchi, Y., Kumazaki, A., Yamaki, R., & Suzuki, K.(2012). Japanese High School Students and Peer Aggression via the Internet: A Cell Phone-Administered Survey, COST2012, Vienna

註）本研究は最先端・次世代研究開発支援プログラム「ﾈｯﾄいじめ研究の新展開－「行動する傍観者」を生み出すプログラム－」（代表：鈴木佳苗）の助成を受けている。